

# 勇気を出して、一人でも闘う

松本侑壬子・ジャーナリスト

スタンドアップとは立ち上がること。これは、アメリカ・北ミネソタの鉱山で実際に起こった勇気あるセクハラへの闘いを真正面から描いた作品である。夫の暴力から逃れて家を出たジョージ（シャーリー・セロン）は、2人の子どもを連れて故郷の鉱山町へ帰ってきた。そこは古い閉鎖的な土地柄で、10代で未婚の母になり、今また父親の違う子どもを連れて戻ったジョージに対して周囲からの視線は冷ややかだ。ベテラン鉱山労働者である父親ですら迷惑顔だし、母親は頭を下げて夫の元に帰るのが一番だと言う始末。

あんな暴力に耐えるくらいなら、1人で子どもたちを養うほうがよほどましだわ。ジョージはこの町で実入りのいい鉱山労働者として働くことに決めた。若くて美人で元気なジョージが、男たちの領分とされてきた鉱山という職場に加わったとたん、猛烈な反発が起こる。美人だから口笛吹いて歓迎、なんて甘いものではない。男性が“女の領分”とされてきた職場に入ってきて、女性の側からの反発などまず聴いたことがない。しかし、逆の場合は、世の東西を問わず、女性は許しがたい侵入者が挑戦者と受け取られてしまうのはなぜだろう。かつてマラソンやボクシングにおける女性選手らも似通った体験をしているはずだ。

ジョージへの反発は、まず幼稚で暴力的ないじめから始まる。すぐにエスカレートして卑猥な言葉を投げつけ、トイレに汚物を撒く、嫌がらせの張り紙をする、果ては、人気のないところで強姦まがいの脅しをかける。ついに息子までが学校でいわれのないいじめに遭うに至って、ジョージ

の怒りが爆発する。

鉱山には以前から少数ながら女性労働者がいないわけではなかった。病気がちな夫の代わりに長年ここで働いている旧友グローリー（フランシス・マクドーマンド）は、頼もしい味方だった。しかし、多くの女性たちは男たちの反発を十分に承知で、しかも無言でそれに耐えて働いてきた。

理不尽なことをされても、それを労働妨害や人権侵害として抗議したり告発したりする者はいない。そんなことをすれば、鉱山での仕事の現場にいらなくなることを知っているからだ。みんな働くには、差し迫った事情があるのだ。

「けれど」と、ジョージは考える。このまま耐えるしかないのか？ 何もかもうまくいかないのは、私が女性的身で鉱山で働くからなのか？ 自業自得なのか？ それでは仕方がないとあきらめるしかないのか？ グローリーが突然倒れ、孤立無援の中で煩悶のあげく、彼女は1人でとにかく立ち上がる決心をする。満席の労働組合大会で、思い切って発言した。「私はただ、働きたいだけなの。それを妨害するのなら、訴えます！」と。

嵐のような野次と怒号の中で、思いがけない援軍が現れた。まず、父親が立ち上がり「まあ、娘の言うことを聞け。間違ったことは言っていないぞ」と発言。口も利けない車椅子のグローリーは、頭を壁にぶつけて支援の意思表示。そして、これまで沈黙を守ってきた女たちが立ち上がったのだ。

失うことの恐れから解放された女性たちの＜スタンドアップ＞の力強さ。監督はニュージーランド出身のニキ・カーロ。女性監督である。



アメリカ映画 (124分) / ニキ・カーロ監督

## 『スタンドアップ』

サロンプラス ルーブル丸の内系にて全国ロードショー

